



TITLE:

# 支那人における金屬主義思想と名目主義思想について

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

---

CITATION:

穂積, 文雄. 支那人における金屬主義思想と名目主義思想について. 經濟論叢 1943, 57(5): 416-431

ISSUE DATE:

1943-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/132043>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號五第卷七十五第

彙  
報

需給統制の諸方法……………高田保馬

支那人に於ける金屬主義思想と  
名目主義思想について……………穗積文雄

桐生足利織物業に於ける金融……………田杉競

勞銀と繁殖率……………青盛和雄

交換の一般均衡に就いて……………金森恒利

江戸時代の經濟史書……………堀江保藏

昭和十八年十一月發行

## 支那人における金屬主義思想と

## 名目主義思想について

穂 積 文 雄

### 一

貨幣價值が貨幣素材たる金屬の價值においてなりたつとする思想を金屬主義思想とよび、しからずして、貨幣價值はその素材たる金屬の價值より獨立になりたつとするものを名目主義思想といふとすれば、支那人は金屬主義思想の固執者であるとするのが、從來一般に信ぜられてゐたところのやうである。ことに近世に入り諸國家が滔々として金本位制に趨りたる中に、支那がひとり銀本位の實をとりて動かず、金銀比價の變動にともなふその貨幣の對外價值の變動不安の苦痛に甘んぜるは、支那人が銀に對して特殊異常なる愛着を抱くが故であるとする論者がすくなくなつたが、かくのごときは、すなはち支那人をもつて金屬主義思想の把持者なりとする所以にほかなるまい。けだし、それによれば、支那人は銀に愛着を抱き、從て銀に價值をみとめるが故に銀以外の貨幣に移ることができぬとなるから、貨幣價值は貨幣の素材たる銀の價值においてなりたつことゝならねばならぬはずであるからである。かくて支那人が銀本位制を離脱することはきはめて困難であると考へられ、そこで、銀本位制の不便を克服するためには金爲替本位制によるが上分別とせられたりした。ケンメラの支那幣制改革案のごときすなはちその例である。しかるに、民國二十四年十一月、時の國民政府がつひに斷行した幣制改革は、

中央・中國・交通の三銀行（翌民國二十五年一月より中國農民銀行もこれに加はる）の發行する紙幣をもつて法幣となし、公私一切の支拂はこの法幣によるとするもので、銀より完全に離脱し、名目主義においてなりたつものである。故に右の論者——それが一般普通であつたが——よりみれば、それはまことに支那人の民族性を無視せる暴舉であり、その失敗は火をみるよりもあきらかなるところでなければならなかつた。ところが實際はどうかといふと、これらの斷乎たる失敗の宣告にもかゝらず、この幣制改革は順調に進行し、失敗どころではない、それにおいては貨幣の價値はその素材價値に依存せずして、一つにかゝつて國民政權にあることとなるが故に、民衆の富は國民政權と一連托生の關係に立つこととなり、従てそれは國家の中央集權化に一の大きな役割をになふ結果とさへなり、ために、今次日支事變においてこれが破綻には攻城野戰にもおとらぬほどの困難をなめざるをえなかつたことは今なほわれ／＼の記憶に新なるところである。

そこで支那人の銀に對する特殊異常の愛着が懷疑の對象となり、その金屬主義思想が檢討の問題とならざるをえぬこととなり、かくて支那人をもつて金屬主義思想の固執者なりとするは誤りであるとする論がおこり、さらに進んでは、むしろ名目主義思想こそ支那人の本領ではないかとする見方さへあらはれることとなり、あるひはまた、金屬主義とか名目主義とかいふがごとき西洋流の概念をそのまゝ支那に適用することがそも／＼間違ひではないかといふ聲をもきくこととなる。

だが、はたしてさうであらうか。

おもふに近世支那の貨幣價値の基礎を簡單に金屬主義とか名目主義の概念をもつてかたづけけることはなるほど無理であらう。しかしながら、そのことは、かゝる概念に該當する事實・實體が支那に存するやいなやを究明す

ることをさまたげるはずのものではなく、その意味においてこれを支那に適用することが拒否せられねばならぬ何等の理由もありえぬと思ふがどうか。いな、西洋流の概念といふが、かゝる概念に西洋流だの東洋流だのいふ區別があるものであらうか。なるほどその事實を反省してこれを概念にまで形成することは西洋において成就されたに相違ない。しかし、そのことからこの概念は西洋流のもので東洋流のものでないといへぬことはなほ引力の法則の樹立が西洋でなされたからといつてそれに西洋東洋の區別がないやうなものではあるまいか。この概念形成が行はれなかつたところにはその事實が存在せぬかといへば、そんなわけのものではあるまい。そして、もしその事實が存在するとすれば、それにこの概念を適用することはすこしもさしつかへあるまい。いな適用することがむしろのぞましいとさへいへるのではあるまいか。といつて、支那にこの概念形成がみられなかつたことは支那にこれらの概念に相當する事實が存在せぬといふ理由にならぬからといつて、それが存在する理由となるものではなほさらない。それではそれらのものが支那人にみいだされるか、みいだされぬか。もしみいだされるとして、それははたして金屬主義思想なのであらうか名目主義思想なのであらうか。われ／＼をしてしばらくこれが考察をなすところあらしめよ。

## 二

まづ、支那人において金屬主義の思想がみられるかどうか。

史をひもとくと、周の景王大錢を鑄るの有名な説話をみることが出来る。それは「國語」にみえ、「漢書」に引かれてゐる。しばらく後者に従へば「周景王のとき、錢の輕きを患へ、まさにあらためて大錢を鑄んとす」とある。しかるに、それは、要するに、貨幣の價值が小なるをうれへて大錢を鑄るといふものと解せられる。それで、そ

れは錢を大きくすればその價值もまた大きくなるといふ考にもとづくものでなければならぬ。さすれば、そこには錢の價值はその素材たる金屬においてなりたつとする思想があるとせねばならぬ。そしてそれこそはまさに金屬主義思想以外の何物でもないはずである。だからわれ／＼はこの説話において金屬主義の思想をみる事ができるといひうる。もつとも、この説話の内容の實在性は疑はしいとせられる。しかし、かりにこの説話の内容は實在せぬとしても、そのことはかゝる説話自體の存在を否定することにはならぬ。そして、かゝる説話自體が存在するかぎり、そこに上述のごとく金屬主義の思想が存在することにはかりはないわけである。

周の景王の鑄錢説話は錢の價值が小なる故にその素材を増してその價值を大ならしめんとするものであるが、支那において大錢といふ場合は、一般に、なるほど錢の素材を大にはするけれども、その割合よりもはるかに大に貨幣價值を定めんとするもので、従つて相對的には素材を小にして價值を大ならしむるものである。たとへば三國の時代、吳の孫權は「嘉平五年、大錢一、五百にあたるを鑄、赤烏元年、また千錢にあたるを鑄る」と「晉書」食貨志にみえてゐるが、貨幣價值は五百倍、千倍に定めても錢の形質が五百倍、千倍になつたとは考へられぬ。唐では徑一寸、重二銖六分の乾封泉寶一枚をもつて徑八分、重一銖四綮の開元通寶十枚に當る「當十錢」とし、あるひは同じく「當十錢」たる乾元重寶、さらに「當五十錢」たる重輪乾元錢を鑄てをること「舊唐書」食貨志にみえ、宋でも「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄るべし」などとあるを「宋史」食貨志にみることができ、くだつて明でも「天啓元年、泰昌錢を鑄る、兵部尙書・王象乾、當十・當百・當千の三等の大錢を鑄、龍文を用ひ、略白金三品の制に倣はんことを請ふ、こゝにおいて兩京みな大錢を鑄る」と「明史」食貨志にみえ、清に入りても咸豐年間に大錢を鑄たること「清史稿」食貨志に「大錢當千より當十にいたる、およそ五等、重さ二兩よ

り遞減して四錢四分にいたる、云々」とあるによりてこれをうかぶことができる。そして、これらの例によりてみればかゝる意味の大錢はその貨幣價值がその素材たる金屬の價值より獨立に定められることあきらかで、従つてつぎに論ずるところのかぎりにおいてそこに名目主義の思想がみられねばならぬが、しかも、貨幣價值の増大の割合ではないとしても、ともかく貨幣價值を増大するためにはいくぶんなりともその素材の形質を大ならしめんとするところには一片金屬主義の思想の存するをみとめうべく、さらに、かくのごとき大錢においては、結局その素材價值より獨立に賦與せられたる名目價值は下落すること、たとへば、右の孫權の大錢については、「錢すでに太だ貴く、たゞ空名あるのみ、人間これを患ふ」と「晉書」食貨志にみえ、唐の大錢も、たとへば重輪乾元錢を行ふや「穀價騰貴して米斗ごとに七千にいた」つてゐるが、穀價の騰貴はそれだけ貨幣價值の下落を意味し、従つて政府部内にてその錢價切り下が論ぜられ、開元通寶錢との開きを三對二にすることが説かれるにいたつてゐること「舊唐書」食貨志にみえ、宋の「當十錢」も價值下落して「折二」「折三」となつてをること「宋史」食貨志にみえ、明の大錢も、あの後「大錢の弊をいふものあり、詔して南京大錢を鑄るを停む云々」と「明史」食貨志にみえてゐるがその弊といふはおそらくその貨幣價值の下落かまたはそれと同じことであるが物價の騰貴なるべく、清の咸豐年間の大錢も、「當千・當五百折當過重なるをもつとも先に廢れ、當百・當五十ついで廢れ、……すなはちもつばら當十錢を行ふ……當十錢行はることひとり久し、しかれども一錢は制錢二に當る云々」と「清史稿」食貨志にみえる。これによりてこれをみれば、大錢の價值はたとへその素材より獨立に定められても、やがてはその價值の下落をみ、結局その素材價值相當のところに落ちつかんとするを知る。そしてそのことは支那人に金屬主義の思想が強固なるを物語るものとなすをさまたげぬかと思ふ。もちろん、素材價值よ

りはるかに大なる價值を附與する大錢においては私鑄貨が行はれ、従つて錢貨の數量が増大するが故にその價值が下落すると考へるむきもあるかも知れぬ。なるほどそれも大錢の價值下落の一因でないとはいふべからず、そしてそれは金屬主義思想には直接歸すべくもない。しかし、そのことはひとり大錢の價值をのみ下落せしむるものでなくて貨幣價值一般を下落せしむるはすである。しかれば大錢の價值を下落せしむる因子は何ぞやといふときはそれはやはり右の金屬思想に歸せらるべきではあるまいか。かりにこの數量説をみるとても、なほやはり素材價值が貨幣價值に伴はぬが故にそこに大錢の貨幣價值の下落が生じることが否定せられねばならぬことにはならぬ以上、そのかぎりにおいてそこに金屬主義の思想をみつゝることはゆるされるであらう。いな、私鑄錢の盛行はその數量が増大することによりて貨幣價值を増大するのみでなく、私鑄錢はもとその素材が薄少劣惡なるを普通とし、それ故に貨幣價值を下落せしむるは蔽ふべからざるところであるが、そしてそれは、數量増加の場合とことなり、貨幣價值一般をではなくして、私鑄せられる種類の貨幣すなはちこゝでは大錢の價值を下落せしむるわけであり、それだけ大錢の價值下落の因子としてとりあげらるべきものであるが、この素材が薄少劣惡なるが故にその貨幣價值を下落せしむるといふことはすなはち金屬主義の思想の發現を意味するものでなければならぬことと多言を要せぬところであらう。

ところで私鑄といへば、ひとり大錢のみにかぎることではない。支那では錢のあるところ影の形に添ふごとくである。されば明の丘濬のごとき、「錢の弊僞にあり、鈔の弊多にあり」といつてゐるぐらゐである。そして私鑄は錢の貨幣價值の下落を導くことが普通であること、たとへば、「史記」平準書を見ると、「民また間々錢を盜鑄し、あげて數ふべからず、錢ます／＼多くして輕く、物ます／＼少くして貴し」とか「郡國多くは姦して錢を



鑄、錢多くして輕し」とあるがごとくであるが、しかし、それらの例はいづれも私鑄は錢の數量を増加するが故にその貨幣價值の下落を招來するといふことを示すものであり、そのことは私鑄が貨幣價值を下落せしむるといふことは何等金屬主義思想の存在を立證する所以でないといふことを立證する所以にほかならないかのごとくである。しかし、考へてみれば私鑄錢行はれて錢の數量が増し、そこに貨幣數量説の理が顯現するといふことは私鑄錢が流通することを前提とする。しかるに、私鑄錢が流通するのは私鑄錢でもともかく素材だけの價值はこれを認めるが故に流通すると解せねばならず、そして、そのことは、金屬主義の思想のあらはれでなければならぬ。かつて述べたところであるが、私は支那に在りしころ一度鑄造の銀元をつかまされたことがある。その場合私は一圓の損失をしたと思つたものであるが、支那人の中にはそれを八十錢かで買つてもよいと申し出るものがあつて面食はされたものである。しかし、聞いてみれば八十錢以上に使へるからといふのである。もしかしたらまた一圓として人につかまます氣だつたかも知れぬが、ともかく鑄造貨幣が決して無價值でないことはこれをもつてもよく知ることができよう。そして、その背後には金屬主義の思想が想定せられねばならないことといふまでもあるまい。かくて、私鑄が貨幣價值を下落せしむるといふことを貨幣數量説によつて説明するとしても、そこに金屬主義の思想をみとめざるをえぬのであるが、私鑄が貨幣價值を下落せしむることの原因自體が金屬主義の思想による場合すらある。たとへば、「宋書」顏竣傳に、「景和元年、沈慶之、私鑄を啓通し、これに由り、錢貨亂敗し、一千錢、長さ三寸に盈たず、大小これにかなふ、これを鵝眼錢といふ、これより劣るもの、これを繩環錢といふ、水に入りて沈まず、手に隨つて破碎す、市井復た數を料らず、十萬錢一掬に盈たず、斗米一萬、商貨行はれず」とあるがごときは、いふまでもなく、「宋史」食貨志に、「民間盜鑄するもの衆く、錢文大に亂れ、物價

翔購し」とあり、「金史」食貨志に「承安寶貨を私鑄するもの、多くは雜ふるに銅錫をもつてし、やうやく行ふと能はず」とあるがときは、いづれも、錢質が劣惡となるにおよんでその貨幣價值が下落せることを示すものと解すべく、しかるときは、その貨幣價值の下落なる現象は金屬主義の思想にもとづくものとなさざるをえず、すなはち、そこには金屬主義の思想がみられねばならぬ。

また、支那の錢はいはゆる穴あき錢で圓形方孔で、この穴に糸をとほしてをく。これが縉で、一縉は一貫または一吊といふが、普通千文よりなり、百文ごとくにふして一くぎりがつけられることとなつてゐた。しかるにこの百文に足らざるものをもつて百とすることが行はれてきた。これを「省陌」または「墊陌」とよび、あるひはかゝる縉錢はどうしても短くなるはずであるから、またこれを「短錢」と呼び、これに對して百文が缺けてをらぬものを「足陌」といひ「長錢」といふ。この「省陌」の史上にみゆる最初は、まづ「隋書」食貨志に梁の大同已後、鐵錢を使用したところ、「所在の鐵錢遂に丘山のごとく、物價騰貴し、交易は車をもつて錢を載せ、また數を計らず、たゞ貫を論ずるのみ」なりし故に「商旅姦詐しこれによりて以て利を求め、破嶺より以東、八十を百となし、名づけて東錢といひ、江・郢以上七十を百となし、名づけて西錢といひ、京師九十をもつて百となし、名づけて長錢といふ、中大同元年、天子すなはち詔して足陌を通用せしむ、詔降りてしかうして人従はず、錢陌ますく少し、末年にいたりつひに三十五をもつて百となすといふ」とあるがそれとしてあげられるやうで、これによりてもわかるとほり、それはもと不法行爲であり、禁止せらるべきはすものであるが、しかし、この風潮が一度生ずるや次第に彌漫することになり、ために、たとへば唐においては、長慶元年九月の詔に、「きくがごとくんば、ちかごろ用錢、所在除陌一ならず、……いまより以後、よろしく貫ごとに、一例に、除墊八十、九

百二十文をもつて貫をなすべし云々」とあるがごとく、結局これを認めることゝさへなる。けだし、「錢荒」の語によりても想察しうるがごとく支那においては錢の不足がまぬがれがたいところとすれば、これはすなはち、その弊を緩和するに役立ちうるものがその合法性を勝ちえた大きな理由の一でもあらうか。かくて、省陌はその後も、たとへば、宋にありても、「宋史」食貨志に、「宋のはじめ、およそ官に輸するものは、また八十あるひは八十五をもつて百となす、しかれども諸州の私用はすなはち各々その俗に隨ふ、四十八錢をもつて百となすものあるにいたる、こゝにいたりて、詔して、所在七十七錢をもつて百となさしむ」とあり、金にありては、「金史」食貨志に「民間八十をもつて陌となし、これを短錢といひ、官用は足陌、これを長錢といふ」とあるがごとく、くだつて清に入りてもそれが普通の現象であつたことは、たとへば、アーサー・スミズの「支那的性格」(The Chinese Characteristics)の中で、「成規には制錢百文を以て一吊文とするが、所によつては九十九文・九十八文・九十六文などあり、山西省城の例では八十三文、直隸省東部地方では三十三文を一吊文としてゐるのがあるし又一層少いものもある程である」(自神徹氏、同名譯本、六一頁)とあるによりてこれをうかゞふことができる。省陌はかく支那においては普通の事象であるが、これは見方によれば名目主義思想のあらはれともなしえよう。いな、しかなすべきはずである。けだし、それはたとへば八十文しかないものを百文として通用せしむるものであり、とくに法によりてしか宣言してその效あらしむるものであるから、これをしも名目主義思想のあらはれとはいはずして何をか名目主義のあらはれといはんやといはねばならぬところであらうからである。かく「省陌」は百文以下の錢をもつて百文として通行せしむるものであり、そのかぎりにおいてみればそれは實に名目主義の思想のあらはれにほかならないはずであるが、しかし、法をもつて百文以下のものを百文として通行せしむべしとすることに

よりてはたしてその實があがれるものなりやいなや。そのために物價の騰貴がはたしておこらざりしやいなや。すくなくとも「足陌」と「省陌」とが同價にあつかはれたであらうか。これらに關する精確なる記録は淺學の余のいまだ眼にせぬところであるが、しかし、「水滸傳」を讀むと、第十六回「楊志金銀擔を押送し、吳用生辰綱を智取す」の條に、青面獸楊志が主人の梁中書の命で十萬貫の財寶禮物を宰領して京師に上る途中、黃泥岡で山賊が酒賣に化けて出るに會ふ有名なる場面があるが、そこで、「衆軍いふ一桶いくらか、かの男いふ、五貫足錢」といふ會話がとりかはされるのであるが、この「足錢」は普通には「ちやうど」と解せられてゐる。（鹽谷溫博士、支那文學概論講話、四七九頁）それでは「足錢」はいはゆるびた一文もまからぬといふやうな意味となるが、しかし、私はこれは「省陌」に對する「足陌」のことではないかと思ふ。すなはち、五貫は五貫だが、足陌の五貫だよ、といふのではないかと思ふのであるがどうであらうか。もし、さう解することができるとすると、「足陌」と「省陌」で同じ五貫の値打ちがちがふと考へねばならぬ。けだし「足陌」の五貫も「省陌」の五貫も値打ちが同一だとすれば、たゞ「五貫」といへばすむ。わざ／＼「五貫足陌」と念をおすにおよばぬと考へられるからである。さう考へるとこの「足陌」と「省陌」の關係はちやうどつぎに述べる「大洋」と「小洋」のごとき關係のものである。はなかつたであらうかと思はざるを得ない。そしてこの區別がつぎに述べるところよりしてあきらかなるごとく金屬主義思想の發現であると同じく、「省陌」と「足陌」の區別は金屬主義思想の發現であることは容易に理解しうるところでなければならぬ。しからばすなはち、われ／＼は、普通にはそこに名目主義思想をこそ見いだすべきところの「省陌」においてかへつて金屬主義思想を見出だすことができるといひうるわけである。

つぎに大洋・小洋であるが、大洋といふのはいはゆる銀元、すなはち一圓銀貨のことで小洋といふのはその

補助貨たる小額銀幣で五角、二角及び一角に分かれるが、その中でも最もよく流通してゐたのは二角あるひは兩毫とよばれたものである。これらの小額補助貨はもと十進法により十角を一圓とする名目貨幣であつたのであるが、その實質はかならずしも十進法の割合になつてゐなかつたのである。實質が十進法の割合になつてゐないにもかゝらずその價值を十進法に定めたのであるからこそ、それらは名目貨幣であるわけであり、われわれはそこに名目思想を見ることができる次第であるが、しかしながら、實質をとまはさるこれら補助銀幣はつひに銀元より絶縁して名目貨幣たるの實を失ひ、同じ一圓でも大洋の一圓と小洋の一圓は別で、大體小洋二角六枚一圓二十仙が大洋一圓に該當する狀態を現出するにいたつてゐた。それで、物を買ひに行つてもたゞ値段をきいただけではわからぬので、かならず大洋であるか小洋であるを附加せねばならぬことさきの「五貫足陌」といはねばならぬと同じであつたのである。そしてかくのごとき狀態を現出せしむるにいたつた原因を追究しゆけばわれわれはそこに金屬主義の思想につきあたらざるをえぬといふまでもあるまい。かくて、こゝにおいても、われわれは本來は名目主義の產物の中に金屬主義思想の顯現を見るにいたる次第である。たゞし、小洋貨の價值下落、名目性の喪失をもつてその濫發に歸するものもあるけれども、もしさうであるならばそれはひとり小洋貨の價值を下落せしむるにとゞまらぬであらうし、かりに實質が十進法の割合に應じて十角が一圓と實質を同じくするものとせばいくら小洋貨を濫發しても十進關係を破ることはないと考えられる。さすれば、小洋貨の價值下落、名目性喪失は實質價值と名目價值の開きに基因するといふべく、從てそれは金屬主義思想の顯現といはねばなるまい。

また、支那にありてはその紙幣の起原についてはいろいろ説もあるが、まづ宋の交子においてはじまるとする

が通説のやうであるが、この交子ははじめ、すつと兌換券であるから、紙幣は金屬貨幣の表象であり、金屬主義思想より離脱せるわけではないといはねばならぬ。もつとも、濫發の結果兌換不能に陥り不換紙幣に轉化する場合もあり、その點においてみれば名目主義の思想のあらはれとも見るをうべく、すくなくとも金屬主義思想よりの解放であると思ねばならぬかとも思はれるやうであるが、かゝる場合にはたいいて紙幣の價值は下落して壅滯通ぜざるにいたるやうであるからやはりそこには金屬主義の思想をみとめねばならぬことになるかと思ふ。たとへばつぎにかゝげる諸事例はそれを示したるとなしうであらう。すなはち、「宋史」食貨志をみると、「交子、給多くしてしかうして錢足らず、價はなだ賤しきを致す、すでにしてつひに實錢なし、法行ふべからず」とあり、「元史」食貨志には、「毎日印造し、數計すべからず……交料の人間に散滿するもの、これなきところなく、昏軟せるものまた行用せず、京師料鈔十錠、斗粟にかふる、うべからず、……すでにして所在の郡縣、みな物貨をもつて相貿易し、公私積むところの鈔、つひにともに行はれず、人のこれを見ること弊格のごとく國用これによりてつひにとぼし」とあり、また「明史」食貨志にも、大明寶鈔が濫發の結果、洪武二十六年ころ、すでに、もと鈔一貫錢千文にあたるはずのものが、鈔一貫僅に錢百六十文といふ鈔の價值の大暴落をきたし、つひに鈔法の壅滯を惹起してゐることが誌されてゐるがごときがそれである。もちろん、いくら紙幣の價值が暴落してもその素材價值までは降るまい。けだし、紙幣の素材價值はまづ無といひてしかるべきであらうから、しからばそのかぎりにおいてそこに名目思想がみられはせぬか、とかういはれるかも知れぬ。しかし、その場合にはつぎのごとく考へることができはせぬか。すなはち、いまも述べたとほり、支那における不換紙幣といふのはもと／＼はじめからそれを目的とせるものではなくて結果においてさうなるといふだけである。それでその價值が素材價

値以上であるのはそれだけ兌換能力があるのではあるまいか。もしも全然兌換能力なき場合はすなはち壅滯不通となるのではあるまいか。とはいふものゝ不換紙幣もそれが紙幣なるが故にあるひはきはめて低價においてゐるとしても流通することがあるかも知れぬ。その場合にはそこに名目主義の思想をみつめなければならぬ。それはいふまでもない。なほ、いはゆる法幣においてはまつたく名目主義の思想をみつめざるを得ぬことことはるまでもあるまい。

最後に、支那においては早くより黄金や銀が貨幣の役割をはたして居り、とくに銀は金の時代より貨幣として重大なる位置を占め、とくに明末より清に入りてその重要性はますます加はりつひに銀本位制の實をとることとなるのであるが、それらは普通秤量貨幣のカテゴリに屬し、とくに銀はいはゆる元寶銀として秤量貨幣に屬するとせられる。そして秤量貨幣が金屬主義思想の產物なることはあらためて説くまでもなく、ことは自明の理に屬するといつてもさしつかへないかと思ふぐらゐである。

### 三

われ／＼は前項において支那人における金屬主義思想をうかゞひ、それがいくたの事象の中に見出されることをあきらかにしたのであるが、さて、しからば支那人は金屬主義思想の把持者であるにすぎず、支那人にみられるものは金屬主義思想にかぎられ、名目主義思想はこれを見ることができないであらうか。われ／＼は、しばらくこれが考察をこゝろみるであらう。

すでに前項において、支那人における金屬主義の思想をうかゞへる際そこにわれ／＼は、名目主義思想の隠見せるをみてゐる。だから支那人が金屬主義思想の把持者であるとしても、それ故に彼等は名目主義思想の把持者

にあらずと斷すべからざるはもとよりあきらかなるところでなければならぬ。それでは支那人における名目主義思想はいかにあらはれるか。

まづ、支那においてしばしば大錢が行はれ、それにおいて素材價值を増大せしむる割合をはるかにこえる大なる名目價值がなりたしめられることはわれわれのすでに前項にみたところであるが、それにおいて名目主義の思想がみられることは、その際に指摘せるところのごとくである。もちろん、大錢の價值が下落して大體實價値に復歸するところに名目主義思想が金屬主義思想の軍門に降るをみるといひうるとしても、それでもなほ、かゝる大錢においてその名目價值をその素材價值より獨立に賦與するといふ事實そのものは名目主義思想のあらはれであるといつてよいと思ふ。

そして大錢において名目主義思想がみいだされるとするならば、省陌においてそれがみいだされぬといふ理由はないはずでなければならぬ。けだし、前項省陌について述べたるところよりしてあきらかなるがごとく、省陌は百文にたらざる錢をもつて百文なりとするもの、たとへば八十文をもつて百文とするものであり、大錢はたとへば宋において「小銅錢三にして當十大銅錢一を鑄る」がごときもので、いはゞ三箇の錢をもつて十箇の錢に通用せしむると同じ理のものであり、しからば大錢と省陌は結局その原理においては一に歸するといはねばならぬからである。

つぎに、清朝に入りて小額補助銀幣たる五角、二角等が、その一圓銀貨との實質的比例を離れてそれから獨立に十角を一圓とする十進法において鑄造せられたことは名目主義思想のあらはれにほかならぬとみうることにすでに前項においてあきらかにしたところのごとくである。



また、紙幣は支那においては民國二十四年の幣制改革以前においては兌換券の性質を有してゐたのであるが、濫發の結果、兌換を停止するにいたれる場合があつたことはすでに前項においてこれを述べておいたとほりであるが、兌換券の兌換を停止して不換紙幣と化せしむるといふことが名目主義思想のあらはれであることは、そもく、名目主義の概念は不換紙幣においてもつともよくなりたつことをおもへばまた多言を要せぬところであらう。それでも兌換券が不換紙幣と化するにいたるはまだいはゆる「やむをえざる惡」であるとしても、——といつて、それが名目主義思想のあらはれであることにかはりはないが——右の幣制改革の產物たる法幣にいたりては、はじめより不換紙幣として發行せるものであるから、支那人における名目主義思想はこゝにいたりていよいよ完全に發現されたといふをはゞからぬであらう。

なほ紙幣といへば、村松祐次氏がその勞作、「中華民國の通貨と其價值主義に就いて」において「發行者に對する勢譽が強固なれば假令不換紙幣でも（兌換券であつてもそれが少し交通の不便な奥地へ流入した場合を想像すれば不換紙幣と大差ない。）充分に流通し、場合に依つては、つまり需給關係の投合の状態に應じて、現銀貨に對するプレミアムさへもついたのである」ことを、かつての南支各地における香港紙幣、佛領印度支那發行のピアストル・ド・コンメルス紙幣および東三省における留紙幣や、日露戰爭後の日本の軍票、橫濱正金銀行の鈔票（銀圓）、さらには朝鮮銀行券（金圓）等をあげて例證してをられる。

#### 四

以上われくは金屬主義思想や名目主義思想が支那人においてみいだされるかどうかについて考察した。そして、その結果、われくはそのいづれもが支那人においてみいだされること西洋人におけるとかはりないことを

知つた。たゞ、支那においては、それは單なる事實たるにとゞまり、西洋におけるがごとく概念にまで形成されるにいたらなかつたといふだけである。しかも、支那人においては金屬主義思想も名目主義思想も二つながらみいだされることは遠い昔より降つて近世にいたるまで茫々二千載にわたる事實であることをみた。しかしながら、二者ともにみいだされるといふことはかならずしも二者が同じ強さであつたことを意味するものではない。では二者に強弱の差があつたかといへばしかりと答へざるをえず、しからばいづれが強、いづれが弱といへば、金屬主義の方が力強いと答へざるをえざることは上述せるところよりの當然の歸結といふべく、これ、從來一般に、支那人は金屬主義思想の固執者なりと斷ぜられた所以であらう。もつとも最後の幣制改革にいたつてつひに不換紙幣の導入をみ、名目主義思想が金屬主義思想を克服せるをみるにいたつてゐることはこれをみとめねばならぬ。

なほ、從來人をして支那人は金屬主義思想の固執者なりと斷ぜしむるにいたれる諸事情を考へてみると、貨幣發行者たる政府に強固なる信用がなく、従て素材價値に依存するの風潮を訓致せるはいなみがないところではないかと思ふ。してみると、この場合でも、金屬主義思想をもつて支那人の民族性に歸するのはどうであらうか。たゞ支那人においてはかゝる條件の下に金屬主義思想が強くあらはれるにいたつたとすべきではあるまいか。ことに、かくのごとき條件の下ではかくのごとき思想をいだくにいたることはひとり支那人のみでなく比々みなしかりと考へられるにいてます。それは支那人の民族性に歸すべからざることになるのではあるまいか。それは民族性に歸すべからずして、むしろ貨幣理論に歸せらるべく、すなはち、それは民族性の發現ではなくて貨幣理論の發現以外の何ものでもないのであるまいか。そして、そのことは幣制改革がよくこれを實證するといへるのではあるまいか。